

第2回多摩川流域歴史シンポジウムご意見・ご質問カード(1/3)

分類	質問、意見、感想	質問、意見、感想	回答	回答者
質問1	歴史文化	<p>小田原北条氏が江戸をどんな風に経営していたか教えてください。家康が入ったときは人口数千人の漁村だったと読んで信じておりました。</p>	<p>小田原の北条氏の経営方法は幾つかあり、1つは経済的に関八州をどのように経営していくかということです。小田原の本拠は小田原城ですが、北関東の経営をする上で小田原は西に偏り過ぎていたので、そのため最後の北条氏直の代に、父の氏政は隠居していましたが江戸城に入り北関東の経営に乗り出していました。要するに家康は、小田原というところでは、地政的にも関八州という広大な版図を維持できないため、氏政が江戸城に入り北関東の経営することの重要性を知っていたのです。</p> <p>この点で、関東の動脈となる河川の舟運を掌握して所領の経営を行った例として、関東の将軍が挙げられます。室町幕府は足利尊氏が京都に興しましたが、東国は遠方になるため、経営するための出先機関が置かれました。鎌倉に幕府の出先機関を置きますが、初めは尊氏の子義詮が入部しましたが、その後はやはり尊氏の子である基氏が入って鎌倉公方として東国を治めました。その血筋は関東の将軍とも呼ばれ、以後、鎌倉公方は代々鎌倉にいましたが、成氏(しげうじ)の代になって補佐役の関東管領と敵対して鎌倉から退去して、下総の古河に入り、利根川筋を挟み幕府や関東管領勢力と対峙していきます。古河を本拠としたので古河公方とも呼ばれ、最後の代は義氏と言いますが、義氏は現在の葛飾区青戸に所在する葛西城に入ります。その後、関宿城や古河城などに移座しますが、義氏に関する史料を見ると、古河公方が江戸川の水系の交通を管轄していることがわかります。後に、八王子城にいた北条氏照が義氏にかわって管轄することになります。つまり、関東の内陸と海とを結ぶ動脈として、東京低地を流れる河川が特に重要だったということです。そこを古河公方がおさえ、小田原北条氏もおさえました。そのことを考えたときに、江戸や東京低地という地域は、交通上、そして経済的、更に軍事的にも非常に重要な役割を持っていたのだといえます。徳川家康は、幕府を興し徳川家太平の世の基礎を築いた人物ですから、そのような点も含めて関東の水運をおさえることのできる江戸という地域を当然考えていたと思います。</p> <p>もう一つ話をしますと。都市伝説の類いになってはいますが、昔は太田道灌が平川を付け替えて日本橋川を開削したと言われていました。しかし太田道灌のころの平川の流路は、江戸城の大手門に至る内濠のラインだと考えられます。おそらくそこまでが太田道灌のころの江戸城の外堀で、江戸城の範囲ととらえることができると思います。つまり平川の付け替えは太田道灌は行っていないと考えています。では誰が付け替えたのか、それは小田原北条氏だと考えています。平川の付け替えをして日本橋川の常盤橋までの範囲を江戸城として縄張りを広げたと思っています。そのことは、一般財団法人 日本地図センターが出している『地図中心』という雑誌に掲載していますので、よろしければ読んでいただければと思います。</p>	谷口氏
質問2	歴史文化	<p>当時の人は縦横無尽の用水をどう掘っていたのか？全体俯瞰図による計画的なものか、現場対応なのか？</p>	<p>用水を穿つことは大変な労力が必要です。いきなり現場対応では事業は完遂できません。土地の高低差などを測量などして把握してからルートを決めて掘削します。現代人は、低地において土地の高低差をあまり気にしていませんが、昔の人は洪水などの経験から土地の高い所と低い所の見極めはとても重要でした。低いところはリスクが多くて住めず、高いところが居住域となるからです。用水を穿つのも低い所から高い所へは水が届きませんから、最終の目的地まで低い所を求めながら掘削するわけです。</p>	谷口氏
質問3	歴史文化	<p>舟運、下りはよいとして上りはどのように？許容できる傾斜、流速、舟の大きさはどのくらいまで？</p>	<p>古代から河川の航行には底の浅い高瀬舟が運行していました。遡行する時は帆を張って、上げ潮なども利用して舟を運行しました。近世の利根川では、船の長さは最大で30m程あったといわれ、米俵500~600俵は運べ、一説では千俵以上も積載できた高瀬舟があったといえます。銚子から江戸までは10~15日程度かかったといわれています。</p>	谷口氏

第2回多摩川流域歴史シンポジウムご意見・ご質問カード(2/3)

分類		質問、意見、感想	回答	回答者
質問4	歴史文化	築堤技術のはじまり、確立、発達。技術的中心人物(流派など)、測量道具、理論などを知りたいです。	そもそも現代の人は、古代や中世の人々の技術に対して今よりも稚拙なイメージを持ち過ぎているのではないのでしょうか。例えば、平安京や平城京の街区や大極殿等の建造物のことを考えてみてください。きちんとした測量技術と土木技術なくして都城の建設はできませんし、各地の国府、国分寺も同様です。さらに律令期以前の古墳の造営についても、当時の最先端の土木技術を駆使して畿内や各地の大王墓が造られています。もちろん権力者がその測量や土木技術集団を掌握しているわけです。『六国史』にも築堤や水路や用水の開削などの大規模土木工事のことが記載されています。	谷口氏
質問5	歴史文化	当時の人は、観測技術に限られる中で、巨視的、鳥瞰図的な高低差(絶対高、相対高)をどのように広く、また微視的に正確に理解していたか。	話を、武士に戻すと、戦びととしての武士のイメージだけでなく、葛西氏からは堤を築く技術をもっていたことが史料から確認できることを紹介しました。『吾妻鏡』からも、武蔵野の開発などを御家人に申し付けている記述があり、土木技術、それは自分の所領の開発をするのにも必須なノウハウであったわけです。	
質問6	歴史文化	政治家ではなく、技術者について知りたいです。技術の伝承方法はマル秘だったのか、教育されていたのか。(秘伝なのか、公教育だったのか)	また、戦国時代末の徳川家康の家臣松平家忠の日記をみると、日々城や堤の普請に駆り出されている様子が見えます。近世以前の中世の武士のイメージを再点検する必要があるかと思えます。もちろん中世を通して、土木技術などの技能の継承の仕方や管理は変化していくと思いますが、まずは武士が武芸だけでなく、そのような土木的な面でも力を注ぐことが所領の開発や維持のために必要だったというところを今回は知っていただければ幸いです。ちなみに古代の土木技術については、青木敬著『土木技術の古代史』(吉川弘文館)が参考になると思います。	
質問7	歴史文化	太田庄の政治的位置づけの歴史の変遷および丸子庄、稲毛庄などの石高のちがひ、重要性、流通基盤などを知りたいです。	鎌倉時代は石高ではないのと、当時の生産高の詳細を記した史料がないので数値的な比較はできません。また別に空からの視点ではなく、巨視的に河道や陸路、港などを把握することには長けており、絵図として図化することもしています。その場合、距離を基本とする現代的な地図の手法ではなく、交通手段(船・陸路)による遠近による地理感を図化したようです。時代によって河道や道もかわってきますので、その時代の便路をしっかりと把握することは、経済活動を行う者たちにとって、隆盛にかかわる欠かせない情報だったわけです。	谷口氏
質問8	歴史文化	利根川、荒川など広範囲の地図を空からの視点で時代時代の政治家は理解しきっていたのでしょうか?	太田庄や隣接する下河辺庄は、とともに古くから開発されていた地域で、平安時代末に鳥羽天皇の三女八条院に寄進され、八条院領となっていました。その後、鎌倉府の御料所(直轄地)となります。太田庄や隣接する下河辺庄は、内陸部にあって大きな荘園でしたので、そこで生産された米などの生産物は荘園の持ち主にとっては、重要な財源になったわけです。そして、生産物の運搬する上で、河川を利用した舟運の利便性が高かったのです。そのような状況からも、いかに時の権力者にとって重要な場所であったかが伺われます。	
		太田庄が利根川-荒川の間にあります。そこにつくられた理由として、2つの川の流路変動による肥沃な地であったためと考えるか、舟運の利が得やすいことによるものか?	また現代的な目線で、環境的な面をみると河川が多いので洪水等の災禍のイメージが強いかもしれませんが、当時は船が航行のできる川の道が幾筋も確保されているということになります。物資の運ぶ量も、陸上よりも船を使った運搬の方が、一回の船便で大量に運べるので経済効率も良かったのです。また洪水も災禍という一面的な見方ではなく、肥沃な土壌形成を促す恩恵もあったのです。台地上よりも低地の方がはるかに農業の生産性は高かったのです。昔の人は、地からで災害を抑え込もうとせず、洪水が来るのは折り込み済みで、うまく折り合いをつけて暮らしていました。	

第2回多摩川流域歴史シンポジウムご意見・ご質問カード(3/3)

分類		質問、意見、感想	回答	回答者
質問9	歴史文化	東山道から東海道が主流になった主な理由は何か。川をこえる技術ができたから？渡河か架橋技術か？	<p>内陸の起伏の険しいを東山道よりも東海道の方が利便性が高かったこともあります。宝亀2年(771)に武蔵国が東山道から東海道に所属替えになり、都城と武蔵国の正式な往来は東海道となりますが、宝亀2年以前から武蔵国から防人として赴任する場合でも、すでに東海道を使って西国に赴いていました。古代から東海道の方が海や川の水上交通との結節も良く、経済性も高いルートでした。鎌倉時代には、鎌倉が東国の中心となったことからより東海道が都と東国を結ぶ主要ルートとして重要視されていきます。</p> <p>架橋は技術的には問題ありませんでしたが、防衛上、また架橋や維持管理の面でも費用がかかるため、多くの河川では、古代から渡し船が設けられ、川の流れが速いところなどは船橋がかけられていました。</p>	谷口氏
質問10	歴史文化	合戦を河原で行っていたのは、川は血を流してきれいにするからなのか？都市の人に血をみせないためか？	<p>古代以来の思想では、河原のような広々とした空間、開かれた場所では穢れが伝播しないという考えがあったと指摘する研究があります。都市部での都市や国府をめぐる合戦であっても、戦者の穢れを伴うので、それが伝播しないように河原に出て合戦をしていました。</p>	小野氏
質問11	歴史文化	中世の産業、経済の特徴は何か。薪、炭、木材、食料、魚、生活用品(布、織物)、石材(建材?)などは川を利用して流通していたのか？	<p>太田道灌時代の江戸城下の様子を描写した「寄題江戸城清勝軒銘詩序」という漢詩が伝わっています。それによると、江戸城下には市が立ち、房総から米、常陸から茶、信州から銅、越後からは竹などの品物が集まり賑わっていた情景が詠まれています。</p> <p>各地で生産された製品は、船に積まれて各地の港に運ばれ、市で販売されていました。東京低地でも各津まで運ばれ、一部はさらに入間川、元荒川、旧利根川などの諸河川を遡行して関東各地へもたらされ手いたことが遺跡の調査からも確認できます。</p> <p>中世の産業や経済は、ひとつは中国との関係が非常に強かったといえます。平安時代末の日宋貿易から元・明に至る貿易によって、中国から典籍、書画、薬、調味料、焼物、銭貨など大量の物資がもたらされました。その影響は多岐に亘ります。例えば、輸入された舶載の焼物は、高級品は武家や貴族のステータスシンボルとして好んで珍重されました。日本でも中国の焼物の影響を受け、瀬戸・美濃、常滑、渥美、など東海地方や各地で焼物の生産が隆盛します。また、中世は銭貨を鑄造していないので中国からの渡来銭を基本通貨とした貨幣経済の時代でもあります。鎌倉時代からは為替も発達していました。</p> <p>中国も含め日本各地が海・河川の舟運によってネットワーク化され、各地の港と陸上交通とも結節するなど、商品の販売ルートは幾重にも結ばれていました。もちろんそれは「モノ」だけではなく「情報」も伝達されるわけです。</p>	谷口氏
質問12	歴史文化	江戸を江戸たらしめるに至るまでに徳川家康が果たした役割・功績は何割ぐらいと考えられるか？	<p>徳川家康でなければ、現代の東京に繋がる近世都市江戸を築くことはできなかったと思います。何割かの問題ではなく、家康が事の始まりと捉えられます。</p>	谷口氏
質問13	歴史文化	江戸という地名は秩父平氏系図にある江戸氏に由来するか？またその秩父平氏というのはどんな経緯でこの地に栄えたのか？	<p>武士の名字は、自身の所領の名を冠するのが原則です(武士名から地名が発生することは、武士が台頭する平安時代末から鎌倉時代には原則ありません)。江戸とい土地に秩父平氏の流れを汲む一族が入部し、その土地の名を冠して名乗ったものです。秩父平氏は、桓武平氏の一族で武蔵国秩父郡を本拠とした平将恒を初代として、その子供たちが秩父平氏として武蔵国南部から相模国東部に展開し、関東の有力勢力となります。一族には、川越・畠山・江戸氏などが輩出しています。江戸氏(重長)は、江戸湊をはじめ隅田川の舟運をおさえたので、「坂東八ヶ国の大福長者」(『義経記』)とも称されるほど、経済力を保持していたようです。</p>	谷口氏